青年期女性における父娘関係および父親イメージに関する質的研究
―4 類型の父娘関係と「精神的自立」に着目して―

The Father-Daughter Relationships and Father Images of Adolescent Female
-Focusing on Four Relationship Types and Psychological independence-

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了
菊　地　由香里
Yukari Kikuchi

Ⅰ．問題と目的

１．問題

（１）父親から娘への影響

青年期女性に関するこれまでの研究では、同性である母親と娘の関係が父親のそれと比べて重要視されてきた面がある。しかし、近年では父親と娘の関係によってもたらされる、娘への影響を指摘する研究も多く、性意識、自我同一性、Self-Esteem などさまざまな面に、影響が及ぶことが指摘されている（春日，2000）。

例えば、岩永・藤原（2010）は、娘が父親との距離を保ちながらも尊重され、情緒的に支持されている関係である場合、娘の自尊感情は高いと考察している。重ねて、父親が娘に干渉し過ぎるなど、娘が父親から心理的圧迫を感じる関係である場合、娘の自尊感情は低いと指摘している。また春日（2007）は、20 代、30 代女性に対して質問紙調査を行い、娘が父親のことを恐いと感じることや、父親の頑固さなどは、娘の性的なルーズさなどに関連していると述べている。

（２）娘の中の父親イメージ

これまで父親と娘の関係は、娘のさまざまな特性に影響を与えていることが示唆されてきたが、とりわけ、娘自身の中にある父親イメージからの影響を考慮に入れることは重要である。

例えば小川（1985）は、心の中で常に父親を意識し、父親との内的対話を繰り返すことで、娘は女性特有の感受性を発達させると指摘している。また春日（2005）は、現実の父親だけでなく、それまでの親子関係などをもとに作られた、娘の心の中の心的表象としての父という視点からの検討が必要

であるとしている。さらに、父親から保護されるイメージが、女性が女性らしさを発展させ、性同一性を獲得するのに重要な条件であることが考察されている（伊藤,1988）。

このように、娘は現実の父親の影響だけではなく、娘の中に取り込まれ発達した内的父親イメージの影響を受けている可能性がある。

しかし、父娘研究及び父親イメージに関する知見は、臨床的、または量的研究によって導かれたものがほとんどであり、実際の娘の言説内容そのものを質的に分析したものは数少ない。このような量的分析による研究では、実際の父親の行動内容や娘の心の動き、多様な父娘の関係性などを捉えるには一定の制約があると考えられる。

（3）青年期の父娘関係

青年期は、それまで積み上げてきたさまざまな枠を問い直し、一人の人間として自己を確立する時期であり（宮本・長野,2010）、親からの「精神的自立」が重要なテーマの１つとなる。

例えば、岩永・藤原（2010）の青年期後期の女子を対象にした調査では、娘が父親に存在を尊重されていることや、情緒的支持を感じられるような父娘関係などが「精神的自立」の高さと関係していると指摘した。さらに桜庭ら（2007）は、父親への心理的依存から離脱し、母親と対立していないことが精神的自立を高めるとした。

また､女性では親子関係が青年期以降もアイデンティティ発達などに影響を及ぼすとされており（北村・無藤,2001）、特に父親の養育態度の影響が大きく、父親からの安定した関心が、他者との安定した絆の基盤につながること（田村・井上,2005）が示唆されている。

このことから、青年期における父親から娘へのかかわりは、娘の生涯にわたる影響をもたらす可能性があると考えられる。

２．本研究の目的

本研究ではまず質問紙調査により、青年期女性の父娘関係を「依存葛藤型」「関係疎型」「密着型」「自立型」に類型化（水本・山根,2011）し、類型ごとにインタビュー調査、TAT を用いた心理検査を行い、以下 3 点を探索的に研究する。

① 父親から娘へのかかわり方と、現在の父娘関係にどのような関連要因が見られるのか。

② TAT によって娘の中に内在化されている父親イメージを分析し、さらに、父娘関係、インタビュー調査の分析結果とどのような関連性が見られるのか。

③ 「精神的自立」と父親からのかかわり方にどのような関連要因が見られるのか。

以上、父娘関係の分析に基づき、父親の子育ての一助となる知見を得ること、家庭における父親の

重要性の適切な評価に寄与することを目的とする。

Ⅱ．研究Ⅰ：質問紙調査

1．調査方法

（1）調査目的

質問紙調査により青年期女性の父娘関係を類型化し、インタビュー対象者の父娘関係に偏りがないよう選出することを目的とする。

（2）調査内容

調査時期：2017 年 6 月～8 月

調査対象者：18 歳～30 歳の独身女性（有効回答数：130）

質問紙の内容：

「母娘関係における精神的自立尺度」（水本・山根　2011）の質問項目の「母親」を「父親」に変え、回答を求めた。なお、この尺度は水本（2015）によって、α係数による信頼性及び妥当性が検討されており、父娘関係にも適応可能である（表 1）。

なお、本研究における「精神的自立」とは、「親との信頼関係を基盤として親から心理的に分離して親とは異なる自己を築くこと」（水本・山根，2011）とする。

表 1「父子関係における精神的自立尺度」の下位尺度（水本・山根,2011 より筆者作成）

父親との信頼関係
父親は私の考え方を尊重してくれていると感じる
父親は私のことを信頼してくれていると感じる
私が親になったら、父親がしてくれたのと同じように子どもにしてあげたいと思う
父親に理解されていないと感じることが多い
父親の生き方を支持している
父親は、いざというときには何を置いても私を助けようとしてくれるだろう
父親からの心理的分離
私には、父親とは異なる独立した考えがあると思う
私の人生は父親の人生とは別の独立のものである
私と父親とは、互いに独立した関係だ
父親のことを一人の人間として客観的に見ている
父親の期待にとらわれず、自分の信じたとおりに行動する

2．分析方法

類型化のプロセス

「父親との信頼関係」と「父親との心理的分離」の高－低から 4 類型に類型化する（図 1、表 2）。

図 1　精神的自立の 4 類型化（水本・山根,2011 より筆者作成）

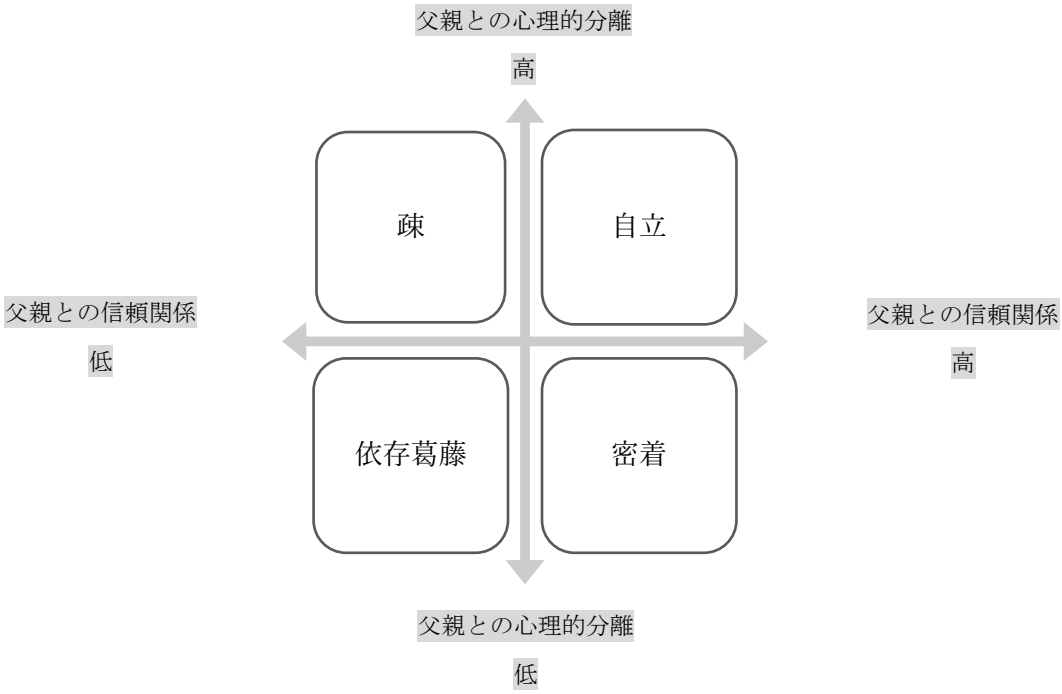


表 2　4 類型の特徴

依存葛藤型	
（「信頼」低×「分離」低）	父親との間に信頼関係を築かずに心理的には分離していない
関係疎型	
（「信頼」低×「分離」高）	父親との間に信頼関係を築かずに心理的には分離している
密着型	
（「信頼」高×「分離」低）	父親との間に信頼関係を築いているが心理的に分離していない
自立型	
（「信頼」高×「分離」高）	父親との信頼関係を基盤として心理的に分離している

3．調査結果

回答者内訳と属性

回答者の年齢および属性を以下に示す（表 3，4）。

表 3　回答者の年齢

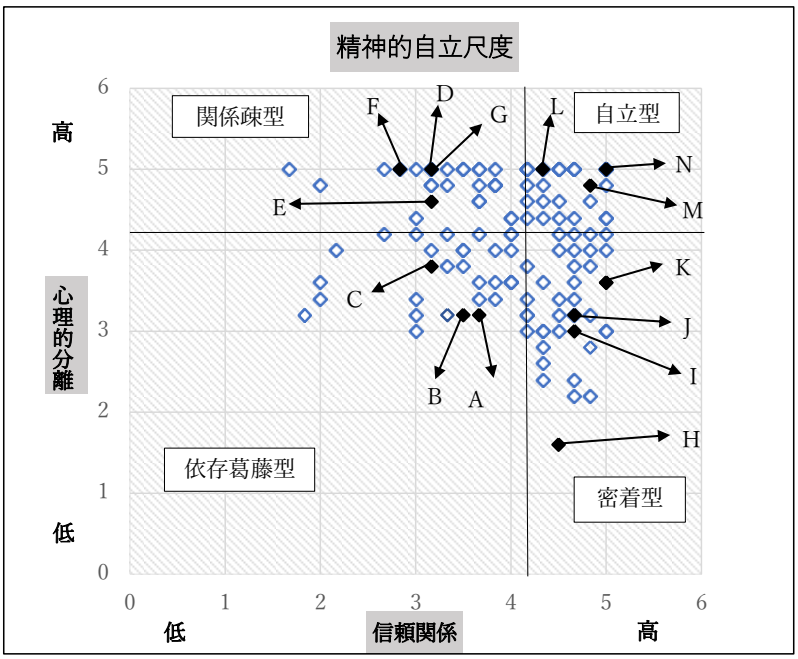
年齢	～20 歳	21 歳	22 歳	23 歳	24 歳	25 歳	26 歳	27 歳	28 歳	29 歳	30 歳	計
人数	47	21	8	15	16	9	3	3	1	4	3	130

表 4　回答者の属性

属性	学生	会社員	その他	計
人数	98	30	2	130

各項目の素点を合計し、項目数で除したものを「父親との信頼関係」得点、「父親との心理的分離」得点とし、中央値（「信頼関係」：Mdn＝4.16、「心理的分離」：Mdn＝4.2）を基準値として、父娘関係を類型化した。以下に、14 名の協力者（A～N）の分布を示す（図 2）。

図 2　回答者および協力者の分布



Ⅲ．研究Ⅱ：インタビュー調査

1．方法

（1）調査目的

青年期女性にインタビュー調査を行い、父親から娘へのどのような関わりが、現在の父娘関係に影響しているのか、探索的に分析する。

（2）調査内容

調査時期：2017 年 7 月～10 月

調査協力者：14 名の協力者についての属性を以下に示す（表 5）。

表 5　調査協力者の属性

	類型	年齢	職業	父母の属性
A	依存葛藤	20 代	学生	父：60 代、会社員 母：50 代、会社員
B	依存葛藤	20 代	会社員	父：70 代、自営業 母：50 代、専業主婦
C	依存葛藤	20 代	会社員	父：50 代、自営業 母：50 代、専業主婦
D	疎	20 代	会社員	父：60 代、自営業 母：60 代、専業主婦
E	疎	30 代	会社員	父：60 代、会社員 母：60 代、パート
F	疎	20 代	会社員	父：50 代、会社員 母：50 代、パート
G	疎	20 代	会社員	父：50 代、会社員 母：40 代、会社員
H	密着	20 代	会社員	父：60 代、会社員 母：60 代、専業主婦

I	密着	20 代	学生	父：40 代、会社員 母：40 代、専業主婦
J	密着	20 代	学生	父：50 代、公務員 母：50 代、専業主婦
K	密着	20 代	学生	父：50 代、自営業 母：50 代、専業主婦
L	自立	20 代	学生	父：40 代、会社員 母：40 代、会社員
M	自立	20 代	学生	父：60 代、会社員 母：60 代、パート
N	自立	20 代	学生	父：50 代、会社員 母：50 代、自営業

インタビュー内容

1 人あたり 50 分ほどの半構造化面接を行った。質問項目は、父娘関係に関する研究や尺度（春日,2005、中村ら,2010、大島,2015）をもとに筆者が作成した（表 6）。

表 6　質問項目概要

父親評価	好きなところ、嫌いなところ 父親役割はどのようなものか
自己評価	似ているところ、似ていないところ 父親にとってどのような娘か
思い出	印象に残っている思い出 父親からされて嬉しかったこと、嫌だったこと
認知の変化	父親の印象が変わったこと
被影響感	父親から影響を受けていること 父親から教えられたこと
父母の関係	父母の関係をどのように思うか 父親からのかかわりと母親からのかかわりの違い

2．分析方法

本研究では、SCAT（steps for coding and theorization）（大谷，2008、2011）によってインタビュー内容の分析を進めていく（表 7）。SCAT を用いる理由としては、分析手続きが明晰で、初学者が比較的容易に着手でき、小規模のデータにも適用できるからである。また、1 つの言語記録をもとに、表面的な語りの潜在的な意味を見出すことができる点も、本研究の目的に適っていると考えられる。

表 7　SCAT の手順（寺下，2011）

1. データの準備
2. ステップコーディング
〈1〉データの中の着目すべき語句を記入する
〈2〉〈1〉の語句を言い換えるデータ外の語句を記入する
〈3〉〈2〉を説明するための概念、語句、文字列を記入する
〈4〉テーマ・構成概念を記入する
〈5〉疑問・課題を記入する
3. ストーリーラインの作成
4. 理論記述の作成

本研究では、語りの理解が主たる目的のため、理論記述の作成は行わず、1 人ひとりのストーリーライン作成に留めた。分析手順は以下のとおりである。

①ストーリーライン作成

〈4〉が、意味のあるつながりをなすことを意識して、順序を入れ替えつつストーリーラインを作成する。

②各類型の特徴的コードの抽出

〈4〉について、類型ごとに意味内容の同質性によってサブカテゴリ、カテゴリとして分類し、データの本質を探る。

3．分析結果

（1）ストーリーライン

下線部分が、SCAT 分析における〈4〉を意味する箇所である。なお、分析手順は省略し、「自立型」である N さんのストーリーラインのみを記載する。

N さん　自立型（信頼度高×分離度高）

娘にとって父親は、家族を守るという責任感を持ち、仕事を通して家族を支えている存在である。父親は家計を支える経済的な柱であり、以前、父親の事故による経済的困窮に陥った際、命がけで働く父親の思いを実感し、父親が守ってくれているという感覚を覚えた。疲れていても仕事をこなすところや、献身的に家族との時間を過ごし、娘を気遣うところが、娘から見て父親の好きなところである。また、家族で休日に出かけた際に、父親の頼もしさを実感することもあり、日頃の父親を見直すこともあった。さらに、父親は素直な感受性を持っており、大切なものを絶対に大切にし続ける人物である。娘はこれらの父親の長所を保持したい願望がある。

家族の中で、父母それぞれ柱としての存在感がある。精神面では母親の支えが大きく、経済面では父親の支えが大きい。しかし、父親の、不満を語らずに働く姿から精神的に支えられることもある。

（中略）

娘の大学進学に対する父親の強い思いを知ったことは、娘にとって嬉しかった思い出の１つでもある。父親は子どもの頃不遇な環境にあったので、子どもたちには自由に生きてほしいと考えていた。娘はそれを知り、感動し、嬉しさを覚えた。こうした娘に対する父親の思いが、現在の娘の生活の原動力となっていると感じている。娘は父親の勤労に応えるように、学業に精を出している。

父親の思う、いい娘を想像すると、自分らしく目標に邁進する娘だと感じる。その点、娘は自分のことを、父親から見るといい娘であると感じている。父親は娘と常に一緒にいたいと考えていると感じるが、娘は父親に対して、存在自体の大切さは感じているものの、常に一緒にいたい感覚はない。そういう意味ではいい娘ではないかもしれないと感じる。しかし、娘は兄弟で唯一父親の趣味の影響を受けており、同調することも多いため、娘は父親と時間の共有をすることが多い。

（中略）

父親の嫌いなところは、ユーモアがないところであるが、夫婦間には独特な感性があり、相互理解

に基づく、ユーモラスで良好な関係であると感じる。娘の家庭は、笑いを厳しく審査する家庭であり、父親は毎回、家族につまらなさを指摘され、そのたびに拗ねるので、娘はめんどくさいと感じていた。以前の父親は娘にとって心配の対象であった。くよくよする父親への不満を持ち、さらに、精神的に疲弊しそうな父親への気遣いをしていた。娘は母親と友達のように気兼ねなく話す一方、父親の性格を考え、父親に対しては、言い方に配慮するようにしていた。最近では、父親が拗ねることが減ったので、娘は父親の成長を実感しており、その成長を高く評価している。父親は年々ポジティブな思考になっており、娘は尊敬や感謝の念を抱くようになった。父親は事故をきっかけに健康志向になり、考え方が前向きになったので、人生観の変化があったのではないかと娘なりの解釈をしている。娘は年々元気になる父親を尊敬している。娘は、父親よりもポジティブなので、父親を鼓舞することが多いが、父親から励まされることもある。

娘は、娘に対する父親の無理解について、母親に愚痴を言うこともある。その際、母親から、父親についての理解を求められる。また、時には父親への労わりを示すようにと、母親から連絡が来ることがある。娘は、両親の関係から、母親による父親理解や対応の仕方の観察学習を行い、父親の心の動きの推察することがある。以前は、悲観的なことを言い過ぎる父親への不満もあったが、娘は、母親の思いも斟酌しつつ、父親の寂しさや、仕事の大変さ、子どもに会える嬉しさなど、父親立場からの理解もしている。娘自身、それぞれの状況下での大変さを、実感を伴って理解できるようになってきた。

母親は裏で娘に父親の愚痴を言うことはなく、娘の前で直接父親に注意、指摘する。娘は父親を反面教師として、似ないように心がけていた。父親は失敗に固執する面があり、娘も同じような傾向があったが、娘は失敗を気にしないように意識的な努力をしたところ、次第に無意識に達成できるようになった。娘は自分を、父親とは全く異なる性格ととらえ、母親よりの性格であるという感覚を持っている。

（2）各類型における特徴的コードの抽出

大髙・唐沢（2015）は、これまでの研究において、他者に対する態度を規定する要因について、態度を抱く主体の認知が重要であるという主張がされてきたと述べている。また大島（2014）は、青年期において、実際の親の養育態度よりも、青年が親をどのように評価しているかといった、子の親イメージが青年の心理的健康に直接影響を与えるとしている。

このことから、娘の父親に対する態度や感情は、父親に対する認知の影響を受けていると考えられる。そのため、「娘の父親に対する認知」、「娘の父親に対する態度・感情」という 2 つの観点に基づき、特徴的なコード抽出を行った。

2．各類型間における父娘関係の比較・考察

コードの抽出結果をふまえて、各類型間における父娘関係（表 8）を比較し、その特徴について考察を加える。「関係疎型」は、関係の特徴により 2 分化することとした。

表 8　各類型における父娘関係の特徴

類型	特徴	
	父親に対する認知	娘の態度・感情
依存葛藤型	経済的な支柱、かつ情緒的なかかわりの対象である一方、娘とは距離をとる。さらに、自分本位で、娘への配慮に欠けたかかわり、感情に任せたかかわりをしてくる。	父親と親密な行動をすることや、父親を肯定的に評価する面もある。しかし、父親とのかかわり方は一貫性に欠け、態度が揺れる面がある。父親との交流は豊かではなく、交流自体に否定的感覚を抱いている。
関係疎型Ⅰ	労働するだけの役割という印象が強く、基本的に家庭内では母親に従属し、被虐的で存在感が乏しい。娘を愛しているが、父娘が交流することは少ない。	父親への不信感があり、父親との交流への抵抗や戸惑いを感じる。
関係疎型Ⅱ	娘を愛しているが、独善的で、娘を尊重することは少ない。経済的支援など、現実的機能を持っているが、父娘が交流することは少ない。	父親から意思決定されることへ抵抗があり、父親との交流には戸惑いがある。また、父親への感情を遮断することがあり、父親には無関心な態度をとる。
密着型	能動的に娘に働きかけ、距離が近い。娘にとって父親は理想的で特別な人物である。また、父親は娘を理解、尊重し、気にかけ、大切にしてくれる。	娘は父親を信頼、尊敬し、憧憬を抱いている。父娘の感覚は同化することがあり、娘の行動には父親の影響が関連することが多い。
自立型	家族への思いやりがあり、娘を尊重してくれる。また、一家の中心人物として、強い信念を持って家族を支えてくれている。また、娘にとって新たな発見をもたらしてくれることもある。	娘は父親を尊敬し、憧憬を抱いているが、父親とは距離があり、父娘は分化している。また、娘は父親視点を獲得できており、父親の立場の理解、心の動きを推察している。

① 父親による娘の尊重と信頼関係

「密着型」「自立型」の娘の語りでは、娘を尊重してくれる父親の存在が多かった。

水本・山根(2011)によると、信頼関係とは親から支持されているという感覚(Lamborn＆Steinberg, 1993)や相互性、浸透性などの結合性(Grotevant＆Cooper, 1986)、親との親和性(Beyers, Goosens, Vansant, ＆Moors, 2003)を土台として発達するとしている。ここでの相互性は、他者の信念や感情に対する感受性を示し、それを尊重することであり、浸透性は、他者の考えを発展させるために承認や励ましを与えることである(平石,2007)。これらのことから、尊重してくれる父親の存在は、親から支持されている感覚などに繋がっているのではないかと考えられる。

一方、父親への信頼度の低い「依存葛藤型」や「関係疎型」における父親は、自分本位で感情に任せたかかわりや、独善的で娘を尊重しないかかわりをしている。春日(2000)は、娘の意見を受け入れず、子どものように自分の意見を通そうとする「頑固」な父親は、娘にとってプラスの影響を及ぼさないとしている。さらに神谷ら(1995)は、女子青年において父娘関係が険悪であるほど、娘は父親を頑固と考えていると述べている。

これらのことから、父親から尊重されている感覚は、肯定的な父娘関係に繋がり、父親の頑固さは良好な父娘関係には繋がらないことが考えられる。

② 心理的分離

「自立型」では、父親は娘にとって常に頼りたい、一緒にいたい存在ではないことが語られた。一方で、父親は家族の中心であり、守ってくれ、それによって娘が鼓舞されるということが多かった。中丸ら(2010)は、父親は娘にとって母親のようにいつでも必要な存在ではないが、critical な時に立ち現れて、その存在感を顕わにし、娘を安心させるとしている。つまり、「自立型」の娘においては、日常的に父親を意識することはないが、必要に応じて支えとして機能する父親が心の中に存在するものと言えよう。

「密着型」では、娘はさまざまな場面で父親を頼り、父親は娘に多くの助言を与えていた。さらに、娘の中には娘の行動や感情に働きかける、万能的な父親が常に存在し、娘の意思決定を左右している。そのため、父親を意識し、父親の喜びを優先することがあり、父親の感覚と分化していない可能性が考えられた。

大学生を対象とした心理的自立の要因についての研究では、父親からの情緒的支持・受容と、心理的自立との間には負の関連が示されている(山田, 2011)。このことから、父親からの積極的なかかわりは、娘にとって頼もしさや、愛されている感覚を抱かせるものではあるが、娘の自立を妨げる可能性があることは見逃せないだろう。

③　恐怖心

「依存葛藤型」「関係疎型」の娘の多くは、父親に愛されている、甘やかされていると語りながら、父親からの暴力的な体験（A,C）、理不尽に怒る姿（G）、交流の乏しさ（B）などの現実的な体験が語られ、父親への信頼度はいずれも低い。そのため、父親との関係が複雑で、両価的な感情の存在が推測された。

「密着型」「自立型」の娘も、かつて父親に対して恐怖心を抱くことがあったが、現在の父親への信頼度は高いとされている。「密着型」では、父親が母親に暴力を振るう姿から、現在でも怒ると怖い父親イメージを持続させていること（H）、父親に怒られた際は猛省すること（J）などが語られた。「自立型」では、怒る父親イメージを母親から付与されており、処罰の恐怖を抱いていた経験が語られた（L）。

春日（2000）は、娘が口にする父親の「怖さ・厳しさ」とは、父親の精神的な弱さの裏返しとしての「厳しさ・恐さ」、あるいは父親になりきれていない、理性的でない無軌道さであると考察している。このように考えると、とりわけ「依存葛藤型」「関係疎型」に見られた父親からの暴力や理不尽な怒り、「密着型」の H さんに見られた母親に対する父親の暴力は、父親自身の未熟さ、幼児性という視点からの検討を要するものである。

父親に対して恐怖心を抱くことは、全ての類型において散見された。しかし、「密着型」の J さんは、父親は、怒っても娘の気持ちを傾聴してくれ、「自立型」の L さんは、父親から実際に怒られることは少なく、娘を尊重してくれると語っている。

したがって、娘が父親に対して恐怖を抱く体験がある場合でも、それに対して納得ができ、正当性が理解できるものであれば、日常生活の父親からのかかわりによって、恐怖心は淘汰されていく可能性も考えられた。

④　母親を介した父娘関係

「関係疎型」の中で、父親についての娘の認知には 2 つの傾向性が存在した。

1 つ目は、家庭の中での存在感、威厳がなく、母親に対して被虐的な父親（D,E）である。2 つ目は、自分本位な行動をとり、娘の意見を尊重しない父親（E,G）である。

こうした異なる傾向性の一方、「関係疎型」4 名に共通するのは、日頃から母親による父親の愚痴を聞かされていたという点である。D、E さんは、母親による父親の愚痴に嫌悪感を抱きつつも、強い母親に対して自己主張できず、母親感覚に同化するように心がけていた。そのため、母親と同一の感覚を保持することが優先され、信頼関係を築けるほど父親と交流することができず、心理的に父親と分離せざるを得なかったと考えられる。

また F、G さんは、父親が母親に対して行った、ある行為を目撃したことにより、母親の父親嫌悪に共感し、母娘間で父親の愚痴を言い合っている。D、E さんとは対照的に、自然に母親感覚に同化

している。このことから、母親と同一の父親嫌悪を保持し、母親に共感しているため、父親と信頼関係を築くことができず、心理的に分離をしていると考えられる。佐藤（1998）は、父親が事例報告の中で問題になるときには、あまりにもその存在感がないか、逆にまったく子どものように振る舞うかの二つのパターンに分かれることを指摘している。同様に、「関係疎型」における娘は皆、父親からポジティブな影響を受けづらいのではないだろうか。

また総じて、娘は夫婦関係を否定的に評価しており、D、E さんは父親と母親、両者について否定的に語り、F、G さんは父親が変化すれば夫婦関係は良好になると語った。

ところで、父娘関係における、母親の影響力を指摘する研究は多い。小野寺（1984）は、父親から情緒的支持を受けている母親をもつ娘ほど、父親に魅力を感じると述べている。また下茂ら（2015）は、両親の夫婦関係が良好であると捉えている娘ほど、現在の父親への評価は高いと述べている。さらに飛田・狩谷（1992）は、母親が父親を肯定的に評価していると認知しているほど、娘も父親を肯定的に評価することを示している。

「依存葛藤型」において、母親は父親の愚痴を娘に吐露している。これに対して A さんは、共感的、受容的にそれを受け入れているが、父親のことを否定的には語らず理想通りとしている。他方、B、C さんは母親が父親の愚痴を言うことに抵抗があり、強く拒絶し、一切聞かないようにしている。そして、夫婦関係についての娘の認知は、関係は良好（A）、離婚しないことが不思議（B）、両親は愛し合ってはいるが、頑固なために関係が修復されない（C）と語られ、一貫性がなかった。

「密着型」「自立型」では、「自立型」の L さん、「密着型」の H さんだけは、父親についての愚痴を母親から聞かされたことに対して不満を感じている。また、「密着型」「自立型」における夫婦関係については、H さんのみ、否定的に評価をしていたが、それ以外の娘からは、否定的に語られることはなかった。

大島（2009）は、青年期後半の娘の父親に対する見方には、妻の夫への信頼感が影響している可能性があり、父親からの娘への影響を考える上では母親からの影響も考慮する必要性があると述べている。「関係疎型」「依存葛藤型」のすべての娘が、父親に関する愚痴を母親から聞かされていたことを考えると、父親への信頼度と母親からの影響は関連があるかもしれない。

しかし、「自立型」「密着型」における娘の一部も、母親からの愚痴を聞き、否定的な思いを抱いた経験がある。そのため、母親からの愚痴の内容や、頻度などとの関連性も検討が必要と考えられた。

⑤　父親理解と関係性の変化

「自立型」の特徴の 1 つは、娘が父親の立場や特性、心の動きを理解するなど、父親の視点を獲得していることである。これは、「密着型」における父親感覚への同化とは異なり、より客観的、分析的に父親理解を深化させているものである。

大島（2015）は、親子関係の発達的プロセスについて質的研究を行い、3 段階の経過があることを

明らかにした。第 1 段階は、親の理解や親への共感による「親の視点に立つ」、第 2 段階は、人間としての親に気付くなどの「親を捉え直す」、さらに第 3 段階はそのような親を統合し「親を受容する」である。このような発達的プロセスは、本研究における「自立型」において特に顕著に見られた。

「自立型」において、父親の短所に対して、それまでの人生経験から構成された（L）という認知を持っていることや、父親の短所を分析した上で娘が父親を支える決意をした（M）こと、娘が父親を励ます（N）という娘の対応が語られている。これらは「親を捉え直す」ことや「親を受容する」ことに相当すると考えられる。特に M さんからは、それまでの父親に対する自身の役割を振り返り、新たな関係性を築こうとする意志が感じられる。このような娘の特徴は「自立型」でのみ認められた。

一方の「密着型」では K さんのみ、父親の短所の受容や、父親の視点からの理解を行っていた。しかし、「密着型」では、父親に対する理想化や万能感意識が強く、短所を客観的に分析することや、1 人の人間として自身と切り離して思案するような語りは少なかった。

また「依存葛藤型」、「関係疎型」では、父親視点や父親理解に関する語りはほとんど見られなかった。これらは、娘が父親との交流を回避する傾向にあり、父親の立場に立つことや思いを致すことへの抵抗を示すものと考えられる。

さらに「自立型」では、父親との交流の中で発見したことについての語りが散見された。それらは、新たな価値観（M）、父親の新たな側面（L,N）、父親に対する新たな思い（M,L,N）などであり、ほとんどがポジティブな経験であった。娘は現在でもそのことを印象深く記憶しており、日常の中で不意に思い出し背中を押され、鼓舞されることがあるようである。

一方「密着型」においても、父親らしさの発見（H）、人間らしさの発見（J）という語りが見られた。さらに、「依存葛藤型」においては、大切に思われていることに感銘を受けた（B）こと、「関係疎型」においては、頼れる面の発見（E）などが挙げられる。

これらは、父親との交流の中で発見されるものであり、交流に拒否的な思いがある「依存葛藤型」「関係疎型」は必然的に少なくなるだろう。ただし、「密着型」においても同様にこれに関する語りは少なく、必ずしも父親の交流の頻度のみによって規定されるものとは言えない。例えば「密着型」では、父親と娘に備わるいわば融合した感覚が影響し、新たな発見を妨げている可能性、もしくは、娘が父親に抱く万能感ゆえに、そこに変化を及ぼすほどの発見が少ない可能性もあろう。

⑥　父親からのメッセージ

「密着型」で特徴的であったのは、娘の中の父親および現実の父親が、娘の行動を頻繁に規定していることである。つまり娘が父親を頼り、相談するという現実面だけではなく、父親が喜び、褒めてくれそうなことを、娘は自分の中の父親と対話しながら探り、それに基づいて行動する（I,K）ことに示される。また、日常の葛藤場面で父親の対応を想像し、模倣するように心がける（J）ことも語られた。このような父娘関係は、他の類型では見られなかった。

他方で「依存葛藤型」「関係疎型」では、父親や両親の夫婦関係を否定的に評価し、反面教師として意識している娘の存在が見られた（C,E,F）。

これらは「密着型」の父親への意識とは様相を異にするが、父親の存在が日常生活に立ち現れてくる点では共通している。そのため、信頼度や心理的距離にかかわらず、父親の影響は多岐に渡ると言える。

さらに「関係疎型」の D、E さんは、父親の労働する姿、仕事への姿勢を印象的深く語っていた。D、E さんは、特に社会人として一定期間働いているので、自身の仕事や働きを通して、父親について振り返ることや、想起する頻度が多いのかもしれない。松浦ら（2008）は、青年期の女子は、キャリア選択には同性の母親の影響を受けるが、働くという直接的なイメージや価値観には、父親からの影響が大きいことを示唆している。父親との直接的な交流は少ないが、父親から垣間見える、社会に開かれた姿が脳裏にあるのかもしれない。

Ⅳ．研究Ⅲ：TAT

１．調査方法

（１）調査目的

主題統覚検査（Thematic Apperception Test，以下、TAT とする）は、ある葛藤場面が描かれた図版を用い、物語を作成することを課題とする投影法の１つである。

父親イメージは、現実の父娘の相互交流の影響を受けることを考えると、筆者は、父娘関係を物語る中にこそ父親イメージが現れてくると考える。父親イメージについて、明確に意識化されていないもの、感覚的に体験されるものを含めて分析するために、本研究ではより内的なイメージへのアプローチが可能な投影法を用い、娘の中に内在化されている父親イメージを分析する。

（２）調査内容

検査時期：2017 年 7 月～10 月。インタビュー調査後、同環境にて TAT を実施した。

検査協力者：研究Ⅱの協力者 14 名に実施した。

使用図版：Harvard 版 TAT 図版から、以下の 4 枚の図版を選択し、検査に使用した。

①図版 2（若い女性の背後に男性と女性がいる農村風景）

②図版 6GF（若い女性の背後から年配の男性が声をかけているように見える）

③図版 10（男の肩に若い女性が顔をよせている）

④図版 16（白紙図版。自由に語ってもらうため。）

使用図版を 4 枚に限定したのは、本研究の目的が、娘の父親イメージを測定することであるので、「若い女性と年上の男性が描かれている」という視点から図版を選択したためである。

２．分析方法

TAT 解釈の熟練者である教授に、数名の分析結果の指導を受けた後、TAT 解釈に関する文献（山本，1992　鈴木，1997、2000）をもとに、筆者が分析を行った。

３．分析結果

得られた父親イメージを類型ごとに分類すると以下のようになる（表 9）。TAT プロトコル、および解釈の記載は省略する。

表 9　各類型の父親イメージ

類型	父親イメージ			
依存葛藤型	A さん	B さん	C さん	
	・情緒的交流がしにくい ・距離が近い ・大切にしてくれる	・理解者 ・大切にしてくれる ・援助的 ・距離をとりたいが親密になりたい	・立場が弱く、影が薄い ・干渉してくる ・距離をとりたいが親密になりたい ・大切にしてくれる	
関係疎型	D さん	E さん	F さん	G さん
	・気遣い、心配をしてくれる ・受容的で支えてくれる ・距離をとりたい ・影が薄い	・情緒的交流が困難 ・情緒的交流をしたくない ・母親を気に掛ける	・情緒的交流が困難 ・弱く、影が薄い ・距離をとりたい ・大切にしてくれる ・自分本位	・交流に抵抗を感じる ・距離をとりたい ・自分本位
密着型	H さん	I さん	J さん	K さん
	・無理解 ・距離が近い ・距離がある ・受容的 ・甘えさせてくれる	・干渉してくる ・甘えさせてくれる ・頼りになる ・安心できる ・大切にしてくれる	・立場が弱い ・無邪気で親密 ・受容的 ・甘えさせてくれる ・共感的 ・距離が近い ・感覚が近い	・親密 ・距離が近い ・感覚が近い ・受容的 ・優しい ・大切にしてくれる
自立型	L さん	M さん	N さん	
	・情緒的に距離がある ・共感的 ・受容的 ・励ましてくれる ・暖かい交流の対象 ・親密	・情緒的交流ができる ・情緒的に距離がある ・大切にしてくれる ・甘えさせてくれる ・受容的	・大切にしてくれる ・親密 ・尊重してくれる ・情緒的交流ができる ・指導者	

Ⅴ．総合考察

１．総合考察

青年期女性における内的葛藤や、自我形成の要因などには、父親の影響が及ぶことが明らかになっている。そして、Ⅰで述べた通り、父親の影響を考えるにあたって、父親イメージの重要性が指摘されてきた。

ところで本研究において、娘の居住形態と「精神的自立」との間の直接的な関連性は認められなかった。娘の「精神的自立」と関連性が認められたのは、実際の父娘関係やそこから内在化された父親イメージであった。このことから、居住形態という外的なものよりも、内的なプロセスおよびそれを反映した関係性の内容が重要であると言えよう。

本章では、各類型の父娘関係と父親イメージへの関連について、さらなる考察を加える。そして、「自立型」の特徴をいくつか挙げ、「精神的自立」へ向かう道についての考察を行う。

（１）各類型における父娘関係と父親イメージの特徴

「依存葛藤型」における父親のかかわり方は、一貫性に欠け、娘の態度も、受け身的であったり衝動的であるなど不安定な様子が散見された。

これは TAT の父親イメージにも表れていた。例えば、大切にしてくれる父親イメージは 3 名すべての娘が保持していた。他方で、情緒的交流がしにくい反面、距離が近い父親イメージ、交流を求めたいという対象でありながら、距離をとっていたいという相反する父親イメージを持っていることが明らかになった。

一方、インタビュー調査では交流を求める姿勢が語られることは少なく、娘は意識的あるいは無意識的に、父親に甘えたいという願望を表現することに抵抗を感じるものと思われる。それは、これまでの父親の一貫性の欠いたかかわり（A,C）、父娘の交流が乏しい中で、母親から語られたネガティブな父親像による偏った印象付け（B）などが影響しているものと考えられる。

「関係疎型」の娘も、父親とは心理的に距離をとっており、父親に対する甘えは語られなかった。TAT では、距離をとりたい対象としての父親イメージが、4 名すべての娘に見出されている。

E さんの TAT の語りには、図版に存在しない母親について言及しており、父親との関係の中で母親の存在が大きいことが示唆された。また F、G さんからは、自分本位な父親イメージが見出されており、現在の娘が抱く父親イメージを反映していた。

しかしネガティブな父親イメージだけではなく、気遣い、心配をしてくれる、受容的で支えてくれる（D）、大切にしてくれる（F）父親イメージなども見られた。とりわけ、D さんの現実の父親についてのインタビューでの語りには、ポジティブな父親の存在は少なかったが、TAT における父親イメ

ージでは肯定的なものも多く見出されている。これは、かつての父親と娘のかかわりの中で獲得された温かな父親イメージの反映とも考えられる。

「密着型」の父親イメージは、甘えさせてくれる、受容してくれるものなど、ポジティブなものが多かった。娘は父親からの能動的で積極的なかかわりや、娘に呼応する父親の姿から、そのような父親イメージを獲得したと考えられる。

このような、ポジティブなイメージが多い中で、「密着型」の H さんには、無理解、距離があるなどの父親イメージが見られた。H さんはインタビュー調査において、父親を頼りにしており、万能な父親と語るものの、父親に気を使い、直接意見を言うことに抵抗があるとも語っている。TAT における父親イメージは、インタビュー調査で語られた父親への抵抗感の裏付けと見なせるかもしれない。そのため、H さんは父親との信頼関係を築けている「密着型」に分類されたが、その様相は「依存葛藤型」の特徴も含まれており、父娘関係を類型化することの限界が示された。

「自立型」では娘の語りも豊かであり、温かい交流が認められた。その一方で、情緒的に距離がある対象としての父親イメージ（L,M）が見いだされた。しかしこれは、両親に対する情緒的結びつきから分離することにより個性化し（水本・山根，2010）、父親から自立している心理的な距離感ではないかと考えられる。さらに N さんは、図版 6GF において、父親から詮索される娘の物語を作ったが、娘は父親に自己主張をし、最終的に父親と和解する。これは、父親と娘の間には境界線があり、分化していることを示していよう。

（2）現実の父親と父親イメージの差異

（1）において述べた通り、「依存葛藤型」「関係疎型」では、インタビュー調査から得られた現実の父親像と TAT における父親イメージの間に差異が見られた。これは、娘が現実の父親との関係を正しく認識していないことや、現実の父親を歪曲して捉えていることが要因として考えられる。

伊藤（1988）は、自身の臨床経験に基づいて、父親への思いと相反する行動を取り問題行動に繋がった青年期女子の事例を紹介し、現実とイメージとの間の差異が、その関係性にネガティブな影響を及ぼすことを示している。さらに「依存葛藤型」「関係疎型」は父親に対する信頼感が低いということを併せて考えると、現実の父親と父親イメージが一致するためには、娘は父親に対して信頼感を抱いていることが必要と言えよう。

（3）「自立型」における父娘関係について

これまでの先行研究を踏まえれば、「自立型」において見られた複数の父親イメージは、娘の精神的健康を始め、娘に多くのポジティブな影響を与えるものと言える。次に、このような「自立型」に

おける父親イメージが、どのような父娘関係に基づいて発達したものか、筆者が考える「自立型」の特徴的な父娘のかかわりを述べる。

① 父親が娘を尊重すること

娘を尊重する父親の姿は「自立型」で最も顕著であり、父親と娘の信頼関係にもつながるものと考えられる。ただし、「尊重」と一口にいっても、娘の感覚はさまざまであった。例えば、娘の思いを優先してくれた上で、父親意見を提示してくれる（L）、父親は娘理解に努めてくれる（M）、対等な人間として娘の相談にのってくれる（M）、子どもたちには自由に生きてほしい（N）などの、父親の態度や思いが存在した。このように、娘の自主性を重んじる姿勢は、娘の独立心を育むことにつながると考えられ、発達促進的に働くことが推測される。

また、娘にとって父親は、社会に開かれた身近な人物のひとりであると言える。そのような父親から尊重され温かく見守られることは、安心して親の庇護から脱し、個を確立していくことへの大きな後押しになると筆者は考える。

② 父親に家庭の中で存在感があること

小野寺（1984）は、母親主導型の家庭よりも父親の権威がある程度強い方が、娘が父親に感じる魅力は高まるとしている。つまり、存在感のない弱々しい父親は、娘にとって理想的であるとは言えず、逆に父親が独善的な場合も、娘には受け入れ難い存在であると推測される。

「自立型」における父親は、家庭の中で重要な役割を担っていた。例えば、家族の精神的支柱（M）、仕事を通して家族を支えている（N）、父親は家族を思う信念が強い（L）、家族への強い責任感を持ち、悠然と構える大きな存在である（M）、家族を守るという責任感（N）がある、などとして認知されている。

一方で、L、N さんは、普段父親を頼ることはなく、常に一緒にいたい感覚はないとした。これは、父親の存在感が乏しかったり、娘が父親を嫌悪しているわけではなく、安心感を与える父親の存在がすでに内在化され、意識せずとも娘の中にあって、支えとして機能しているからであると筆者は考える。中丸ら（2010）が述べた、父親は娘にとって母親のようにいつでも必要な存在ではないが、critical な時に立ち現れて、その存在感を顕わにし、娘を安心させる人物であるということと関連があるように考えられる。

③ 父親に家族への思いやりがあること

「自立型」の父親は、母親に怒られる娘のフォローをしてくれる（L）、父親から励まされることもある（N）など、母親を補完する役割を持って、娘にかかわることがある。

また、父親は娘に対してだけではなく母親に対しても、母親を気遣い家事をこなす（L）ことや、

母親の不得意なことに対するサポート(M)をするなどといった、気遣う姿勢を持っている。内藤(1993)は、女子青年において、娘から見た父親の魅力度は、母親から見た父親の魅力度と関係があることを示している。つまり、父親と娘の関係は単なる二者関係ではなく、母親の父親に対する感覚や、父親から母親へのかかわりを反映していると考えられる。

青年期の娘は、母親と強い情緒的結合で結ばれており、依存対象として母親を選ぶことが多い（小野寺，1984）。そのため娘は、父親から大切にされる母親へ、自身の感覚を同化させ、父親への信頼感や魅力を高めるのであろう。他方で、父親から無碍に扱われる母親を見ることは、自身を否定されるほど耐え難いかもしれない。このような、母親が父親から被虐的に扱われる夫婦関係は「関係疎型」において顕著であった。

しかし、「依存葛藤型」の A さん、B さん、C さん、「密着型」の H さんには、両親の夫婦関係に険悪な一面があるとしながらも、父親から娘に対する愛情を感じていた。飛田・狩谷（1992）は、女子青年の父親への好意・満足感が、父親と母親の仲の良さと正の関連を持つことを示している。したがって、夫婦の仲が悪いにも関わらず、娘が父親からの愛情を感じる場合、娘は父親に対して真の信頼感は抱けず、むしろ複雑な心理状態に陥ることが推測される。それは、「依存葛藤型」の特徴のひとつを示すものかもしれない。

以上より、父親が娘を思いやるだけでは、信頼関係を築くことは叶わず、父親から母親への愛情を娘が認知したうえで、自身に愛情のある思いやりを向けられることが必要であることが示唆された。

２．本研究の限界と今後の課題

本研究では、インタビュー項目にテーマは設けず、包括的な父娘関係を調査している。そのため、得られた情報は多岐にわたり、焦点を絞ることには一定の制約があった。今後は、インタビュー調査や質問紙調査などにより娘の特性を焦点化することで、父親の影響についてのさらなる知見が付与されることが期待される。

また、父娘関係は、父親から娘へのかかわりのみで成り立つものではなく、娘から父親へのかかわりとの相互作用、母親との関係も考慮に入れる必要があるだろう。今後は、娘と並行し、父親や母親に対してインタビュー調査を行うことによって、父娘関係の理解をさらに深化させられるだろう。

参考文献

伊藤研一（1988）「現代における青少年の心の不安」青少年問題 35（6），4-12

岩永亜季・藤原珠江（2010）「父娘関係が娘の自尊感情と精神的自立に与える影響について」長崎純心大学心理教育相談センター紀要 9　75-83

大島聖美（2009）「妻から夫への信頼感が青年期後半の娘の心理的健康に与える影響」発達心理学研究 20（4）351-361

大島聖美（2014）「青年の親に対する認知の重要性　青年期の親子関係研究及び親準備教育の観点から」広島国際大学心理科学部紀要 2（1）69-78

大島聖美（2015）「若者の親に対するイメージの発達過程」家族心理学研究 29（1）34-50

大高瑞郁・唐沢かおり（2015）「成人形成期の子どもの父親に対する態度を規定する要因：父親からの行動に関する子どもの認知に着目して」社会心理学研究 31（2）89-100

大谷尚（2008）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き―」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54（2）27-44

大谷尚（2011）「SCAT：Steps for Coding and Theorization―明示的手続きで着手しやすく小規模データにも適用可能な質的データ分析手法―」感性工学 10（3）155-160

小川捷之（1985）「男らしさ女らしさ―性的アイデンティティ―」馬場謙一他編『エロスの深層』有斐閣，115-141

小野寺敦子（1984）「娘からみた父親の魅力」心理学研究　55（5）　289-295

春日由美（2005）「女性にとっての父娘関係に関する一研究　二つの父娘関係尺度作成と面接関係に関する一研究」心理臨床学研究 23（5）597-603

春日由美（2000）「日本における父娘関係研究の展望―娘にとっての父親―」九州大学心理学研究 1　157-171

春日由美（2007）「女性の性意識と父娘関係」臨床心理学　7（3）371-381

神谷俊次・郭小蘭（1995）「父娘関係，父親像と娘からみた父親の魅力」アカデミア人文・社会科学編（61）195-227

北村琴美・無藤隆（2001）「成人の娘の心理的適応と母娘関係：娘の結婚・出産というライフイベントに着目して」発達心理学研究 12（1）46-57

桜庭蕗・伊藤菜穂子・横田正夫（2007）「青年期における親子関係・心理的自立・抑うつの関連」日心第 71 回大会

佐藤由佳利（1998）「父―娘関係についての一考察　父に同一化した二例」心理臨床学研究 7（2）60-65

下茂郁佳・桂田恵美子（2015）「娘の父親に対する評価に関する研究」関西学院大学心理科学研究 41　51-56

鈴木睦夫（1997）『TAT の世界：物語分析の実際』誠信書房

鈴木睦夫（2000）『TAT パーソナリティ：26 事例の分析と解釈の例示』誠信書房

田村和子・井上果子（2005）「青年期における境界例心性と養育態度の関連について」日本精神衛生学会誌 20　73－87

寺下貴美（2011）「質的研究方法論：質的データを科学的に分析するために」日本放射線技術學會雑誌 67（4）　413-417

内藤徹（1994）「女子学生からみた父親の魅力」金城大学論集.人間科学編 19　63-73

中丸・篠原・坂本・来島・上杉（2010）「娘の自己受容の源泉としての父親―３要因仮説の検討と父娘関係尺度構成の試み―」広島文教女子大学心理臨床研究（1）12-20

飛田操・狩谷佳子（1992）「両親の『仲の良さ』の認知と親子関係」福島大学教育学部論集 51　55-63

平石謙二（2007）『青年期の親子間コミュニケーション』ナカニシヤ出版

松浦素子・菅原ますみ・酒井厚・眞榮城和美・天羽幸子・詫摩武俊（2008）「家族機能が娘の仕事に対する価値観に及ぼす世代間伝達の検討：父親・母親・青年期の娘の 3 者の分析から」日本パーソナリティ心理学会発表論文集　242-243

水本深喜・山根律子（2010）「青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連性から」発達心理学研究 21（3）　254-265

水本深喜・山根律子（2011）「青年期から成人期への移行期における母娘関係―『母子関係における精神的自立尺度』の作成および『母子関係の 4 類型モデル』の検討―」教育心理学研究 59　462-473

水本深喜（2015）「成人生成期の子の親との関係―『親からの精神的自立』『親への親密性』からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差―」教心第 57 回総会

宮本絵美・長野恵子（2010）「大学生女子の親子関係に関する一考察―自我同一性の視点から―」西九州大学健康福祉学部紀要 41, 7-13

山田裕子（2011）「大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連」青年心理学研究 23　1-18

山本和朗（1992）『心理検査 TAT 関わり分析　ゆたかな人間理解の方法』東京大学出版会

謝辞

本論文は、文学研究科、遠藤幸彦教授の多大なるご指導によって、完成させることができました。遠藤先生は常に温かく見守ってくださり、何度も励ましのお言葉を掛けてくださいました。先生の下で論文執筆に励めたことを光栄に思います。心から厚く御礼申し上げます。

本研究内容について、園田雅代教授、中野良吾准教授には、貴重なご指導を賜りました。ご多忙な中ご尽力いただけましたことに、深く感謝申し上げます。

さらに、貴重な授業のお時間を割いて調査にご協力していただきました、文学部の小崎晃義教授、寒河江光徳准教授に、心から感謝申し上げます。

本研究の調査は、多くの方々のご協力なしには遂行できませんでした。ご多忙な中、快く調査を引き受けてくださいました皆様に、深く感謝申し上げます。

これまで、支え励まし合ってきた臨床心理学専修の皆さん、心を砕いてくれた友人や先輩、陰ながらいつも応援してくれた家族に、心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

最後に、本学創立者池田大作先生に、心より御礼申し上げます。